様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５９０２４０

研究課題名（和文）ネガティブインパクトの発生時期と就学・就業への影響

研究課題名（英文）The Negative Effects of Incidences in Youth on Educational Achievement and Job Career

研究代表者
松繁　寿和（Matusige, Hisakazu）

大阪大学・国際公共政策研究科・教授

研究者番号：５０２１９４２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼年期および青年期における外生的に起きるイベントがその後の人生を大きく変更させる過程を分析した。主に生活環境の変化がその後に強い影響を持つと思われる時期の絞り込みと、外生的ショックが発生した後の学歴や職業キャリアを追跡し、影響の大きさを測定することに焦点が当てられた。特に前者に関しては、遺伝や家庭的背景を同一にしても小学校高学年時の差異がその後の人生に大きな影響を及ぼすことを統計的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we aim to analyze the scale and duration of negative effects of incidences in youth on educational attainment and job career. One of the main attempts of our study is to find the crucial age period when people’s life courses start to divert due to the changes in social circumstance and family background. We examine the differences in educational attainment by considering both the years of schooling (quantity) and the reputation of the last attended school (quality), and find that the difference in learning performance at 15 years of age is one of the key factors connected with final educational attainment.

研究分野：教育の経済学

キーワード：ネガティブ・インパクト　学歴　キャリア

１．研究開始当初の背景

キャリア研究において、ある時期の運不運、たとえば教育・訓練や職業獲得の有無は、その後のキャリア形成に大きな影響を与えることがわかっている。特に、人生の初期において発生する格差は、その後のライフパスにおいて大きな差を生み出し、多くの場合取り戻すことができない。また、近年、幼児期に行われる教育投資の収益率が最も高いことが示され、就学前の環境の重要性が示されている。一方、アメリカのハリケーン・カトリーナの災害を取り上げ、学校の移転や転校、家族の失職は子供の学力にネガティブな効果をもたらしたと結論づけている。これらの研究は、成長過程にある子供の家庭環境において深刻な変化が生じた場合、彼らの人生が決定的に変わる可能性があることを示唆している。

２．研究の目的

子供の頃の家庭環境の変化が、その後の人生を大きく変えてしまうことがあるという、社会的に重要な問題は、一般には広く認識されてはいるが、学術的には十分に精度の高い分析がなされてきたとは言い難い。

研究が進まなかったのは、主に２つの理由による。一つは、生来能力差や恒常的な家庭環境の差をいかに取り除くかという問題である。言い換えれば、他の条件は一定として、同一の個人に関して特定の外生的ショックが生じた場合と生じない場合を２度観察しなければならないという物理的には不可能な問題を解決しなければならない。もう一つは、義務教育により児童・生徒が受ける教育内容に大きな差が観察されにくいという問題である。

そこで本研究では、生来の潜在能力や家庭環境の差をコントロールできるようなデータを集め分析を行う。また、後者の問題に対応するために、個人間の差として把握しやすい課外活動や習い事に関する情報を収集し分析を行う。

３．研究の方法

外生的インパクトを受けたグループに生じた影響を見るには、他の条件を一定とするインパクトを受けなかったグループを補足しておかなければならない。本研究では、比較可能なペアを選び出し、ペア内差を各ペア間で比較し、大きなペア内差が生じる時期を特定することで、外生的ショックに対して虚弱なライフステージを見つけだす。

さらに、課外活動や習い事の影響を図るために、特定のコーホートに関して行った回想データを入手し、幼少期の教育経験がその後の人生に与えた影響をパス解析を応用することで追跡する。

４．研究成果

(1) 主な研究成果の一つは、独自にデータを集め、生来の能力や家庭環境をコントロールしたうえで、青年期までの環境や経験の差異が最終学歴にどのような影響を及ぼすかを分析したことである。特に、兄弟姉妹の性別順位というまったく偶然の要因が学力格差を生み出すことを検証しており、先行研究にはない貢献を行った。

主な発見は、1950、60 年代の日本においては、生来の潜在能力や、家庭要因、社会・時代的背景が同じであっても、長男と次男、長女と次女の間での取り扱いが異なるという点である。当時は、長男は次男よりもより質の高い学校に進学している傾向があることがしめされる一方、長女の場合は次女よりも平均して 0.5 年学校就学年数が短くなっていた。しかし、これらの差異は時代が進むとともに消滅していくことも明らかになった。

すなわち、日本が経済的にまだ十分に豊かでない状況では、家計が持つ資源を長男に絞って投下している可能性があったこと、逆に、女子の場合は他の兄弟のために、進学を諦めている可能性があったことを示唆した。生まれる順位や性別という本人の努力とは関係のない偶然の要因が社会的意識と相まって、その後の人生に大きな影響を与えたことがわかった。

この研究のもう一つの特徴は、受ける教育および最終的な学歴の達成を教育年数だけではなく、学校のレベルという教育の質をも計測している点である。その結果、15 歳時に受ける教育の質が、最終的な学歴達成や同一学歴であっても学校の水準に差を生み出すことを明らかにした。すなわち、中卒時に受ける教育の質がその後の学業の達成に決定的な影響を与えるということを明らかにした。

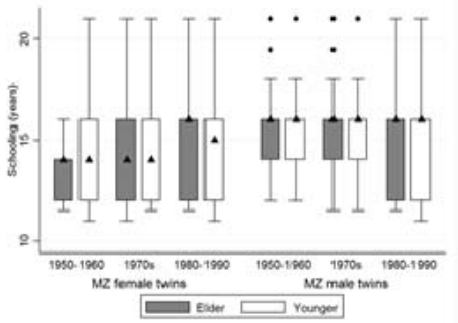

図１　年代別・性別に比較した年長順位と最終学歴

(2) 義務教育により児童・生徒が受ける教育内容に大きな差が観察されにくいために、幼少期の教育や家庭環境がその後の人生に与える影響を把握しにくいという問題に関しては、課外活動や習い事に関する情報を含んだデータを分析することで対処することが可能である。

今回は、これまで他の研究ではあまり注目されてこなかった文化的活動に焦点を当て

た。

フランスの社会学者ブルデュー（Bouredieu、1979）が文化資本論に纏わる考え方を提示して以来、家庭環境や学校教育を通して得られる文化環境や文化的経験に着目した研究が進められてきた。文化資本とは、家庭環境や家庭教育といった家庭的背景から得られる相続的文化資本量および学校や教育制度への投資傾向の大きさによって決定づけられる文化的素養を意味し、それがその後の教育の達成や社会経済的地位の獲得に強く影響すると考えられてきた。

しかし、初期の教育段階の効果を測るには、義務教育期間であるために、子供がうける教育に大きな差はみられないという問題がある。そこで、本研究では、塾や習い事等の学校外教育や科目外教育に関しては家庭的背景が大きな違いを生む可能性に注目した。

統計分析を試みた先行研究では、文化的な活動およびスポーツ活動に関する研究が文化資本および健康資本の観点からそれぞれ進められており、性別によって影響の表れ方が異なること、家庭的な背景に影響を受けること、学歴に影響すること、スポーツ経験が社会的な地位獲得に影響する場合があることなどが示されている。例えば、西島ら（2012）は文化資本を獲得する課程として、幼少期に芸術・スポーツ活動の機会を得る重要性を訴えており、特に、義務教育の初期からの過程に注目し、文化的な活動、スポーツ活動、教育的な活動それぞれの活動がその後の学歴や社会的地位のみならず所得に対して及ぼす直接的または間接的な影響を測る。

本研究では、大阪大学社会経済研究所が実施している「くらしの好みと満足度についてのアンケート」調査によって得られた個票データを用いて、教育の初期段階における習い事が、学歴やその後の社会経済的な地位および所得に対して与える影響を男女別に分析した。特に、本人の出身家庭環境などの背景や個人属性に関する項目、小学生時における習い事の経験、中学生時において熱中した部活動・習い事の経験、学歴、職業と結婚、および所得に関する項目を段階的にわけ、6段階の重層的な構造を分析した点に特徴がある。

結果として、①女性においては文化的な活動が学歴向上を介して所得に影響を及ぼす、②男性においては、文化的な活動が他の活動と相乗効果をもって学歴に影響を及ぼす。③その上、スポーツ活動が他の活動との相乗効果を持ちつつ社会経済的地位にも影響することが明らかになった。

よって、本研究では、男女ともに、義務教育の初期段階から、文化的な活動の経験が学歴や所得に与える影響が明らかとなり、文化芸術活動の経験がもたらす家庭への経済的な利益を示すことができた。したがって、この研究においても、人生の初期段階での家庭的背景の重要性が示されたこととなり、幼少期の社会経済的背景の変化が、子供たちのその後の教育の達成や社会経済手地位の獲得に大きな影響を及す可能性があることを示している。

特に（1）の研究との違いは、比較的最近のデータにおいても、成長過程を詳細に分析すれば、出自という偶然の要素や家庭への外生的変化が強くかつ長期にわたって効果を持ち続けることが明らかになった。

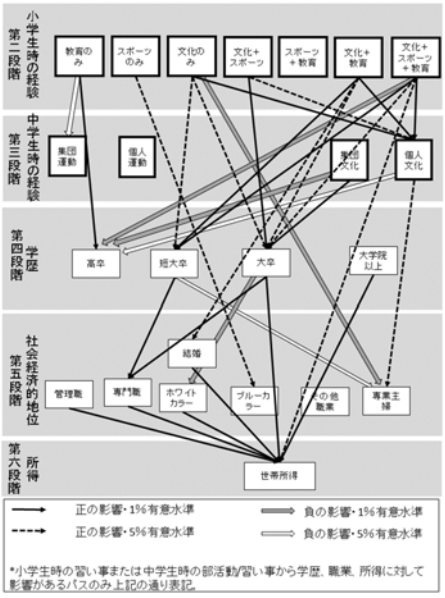

図2　女性における習い事の影響

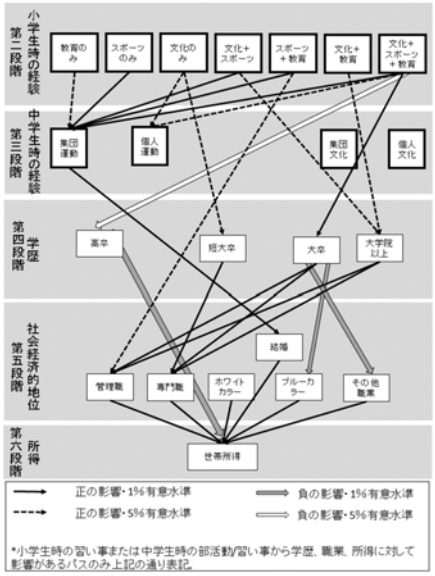

図3　男性における習い事の影響

＜引用文献＞
西島央・木村治生・鈴木尚子（2012）「小中学生の芸術・スポーツの活動状況に関する実証研究―地域、性、家庭環境による違いに注目して―」『文化政策研究』第6号、pp.97-113

Bouredieu, Pierre (1979) La Distinction: Critique sociale du Judgement, Minuit. 石井洋一郎訳 (1991)『ディスタンクシオン』藤原書店

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計　4件)

① 平尾智隆、梅崎修、田澤実、大学院卒の就職プレミアム―初職獲得における大学院学歴の効果、日本労務学会誌、査読有、16巻1号, 2015、21-38

② 柿澤寿信、平尾智隆、松繁寿和、山﨑泉、乾友彦、大学院卒の賃金プレミアム―マイクロデータによる年齢－賃金プロファイルの分析、ESRI Discussion Paper Series、査読有、No.310, 2014

③ 平尾智隆、教育過剰が労働意欲に与える影響―高学歴社会のミスマッチ、査読無、立命館経済学、62巻5・6号, 2014、99-117

④ 平尾智隆、労働市場における学歴ミスマッチ―その賃金への影響、ESRI Discussion Paper Series、査読有、No.303, 2013

〔学会発表〕(計　5件)

① 平尾智隆、梅崎修、田澤実、大学教員との関わりが早期の就職決定に与える影響、日本キャリアデザイン学会第 12 回大会、於北海学園大学, 2015

② 平尾智隆、内部労働市場におけるスキル・ミスマッチ―保有する技能と求められる技能の差、日本労務学会第 44 回全国大会、於北海学園大学, 2014

③ 平尾智隆、教育過剰が労働意欲に与える影響、日本労働社会学会第 25 回大会、於東北福祉大学、2013

④ 平尾智隆、若年労働市場における教育過剰―学歴ミスマッチが賃金に与える影響、日本教育社会学会第 65 回大会、於埼玉大学、2013

⑤ 柿澤寿信、平尾智隆、松繁寿和、山﨑泉、乾友彦、大学院卒業生の賃金プレミアム―マイクロデータによる年齢-賃金プロファイルの分析、日本教育社会学会第 65 回大会、於埼玉大学、2013

〔図書〕(計　1件)

① 平尾智隆、梅崎修、松繁寿和　編著　日本評論社、教育効果の実証―キャリア形成における有効性、2013、252

６．研究組織

(1)研究代表者

松繁　寿和 (MATSUSHGE, Hisakazu)
大阪大学・国際公共政策研究科・教授
研究者番号：５０２１９４２４

(2)研究分担者

平尾　智隆 (HIRAO, Tomotaka)
愛媛大学・教育・学生支援機構・講師
研究者番号：３０４０３８５１

(3)研究分担者

井川　静恵 (IGAWA, Shizue)
帝塚山大学・経済学部・准教授
研究者番号：２０４６１８５８